

町長

ひとりごと

73

齊藤

讓



元日の夜、犬を曳いて外へ出た。真冬とは思えない穏やかな夜である。田中の道を歩めば、眼前

間近に大総の山並が黒く横たわり、その山裾には点々と街路灯が白く輝やき、山際に点る鉄塔の赤い灯が、シルエットのよ

うに、鮮かに天地を分けている。四顧すれば、遠くに芝山、近くは北に宝米、東に傍戸、南には虫生の

小さな山並が、黒い影のように沈んでいる。その懐にも、同じような街路灯や小さな家の明りがところどころに零れ、夜の深さを告げていた。

ブを点滅させながら、この星空を横切つてゆく。飛行機が残すエンジン音や、元の草むらで犬がたてるカ

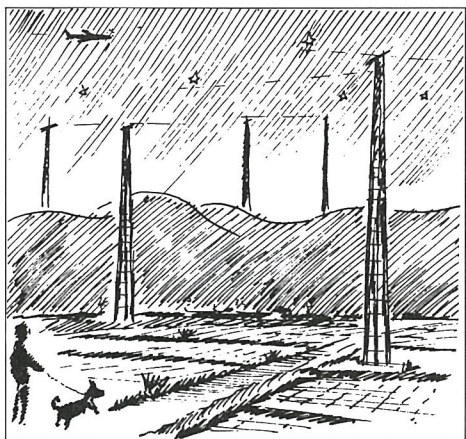
サコンという足音が、やけに大きく耳に響く。すべては静寂と薄闇の中である。なんと美しく、感動的な世界であろうか。

これこそが、神が創り給うた本当の自然の姿であり、里の姿なのではあるまいか。日頃、喧騒や葛藤の渦巻く

中で、慌しく生き、心に傷を負い、ゆとりを失くした現代人は、いまこそ謙虚にこの自然に対して跪き、創造主神の声に耳を傾ける時である。神は必ず愚かなる人間をも見捨てることなく、新たな息吹と喜びを与え

元来生きとし生けるものは皆、自然の中で生かされ、生きてきた。万物の霊長た

星に祈りを



と嘯く人間とて、その例外ではない。しかし人間は、科学を生み出し、それによって生活の利便性と豊かさを

る。その結果、人間は悪かにも物の虜となり、醜いエゴをむき出しにする、心の荒廃した殺伐たる社会をつくり出してしまった。

散らして、自然に背を向け平然としている傲慢な態度は、とうてい許し難い。これを神への、自然への冒瀆と言わずして何と言おうか。誠に悲しい限りである。この贖罪は、浮かれた初詣などでは、と

ても雪がれるものではあるまい。

▼町づくりを進めていくと、必ず「開発か、自然保護か」の議論が起る。これは極めて重要なことであり、決して疎かにしてはならない

命題である。私は、基調はあくまで自然保護に置くべきであると考えている。何是ならば、一度失われた自然を再び蘇えさせることは至難のことであり、また人間の豊かな情操や、やすらぎは、自然の中でこそ育

いかと私は考える。しかし、現実の社会は、皮肉にも緑の薄いコンクリートジャングルの都会に人は集中して過密をなし、緑

保護一辺倒では、いつしか青山ありて人住まずの町と化してしまうことを恐れる。いま人々が求める理想的な住環境は、都会的な便利さと自然の豊かさが共存する

場所だという。見方によれば二律背反する条件でもあるが、尤もなことであり、私達はあらゆる智慧をしばり、汗をかいてこの両者が調和できる町づくりに真剣に取り組まなければならない

い。私は自然六分、便利さ四分の思いいれてよいのではないかと思っ

▼昨年の秋、東北の瀬見温泉に泊ったことがある。山間にへばりつくように佇む小さな温泉街で、街中の道は心細いほど狭く頼りない。翌朝、所用のため一行と別れて、一人瀬見駅に行った。小さな

「それは素晴らしいですよ。でも、近く道路工事が始まると切られてしまうのですよ。残念でなりません。私は多少不便でも、この桜を残した方がよいと思っています」と悔しそうに語った。

今、上天にきらめく星たちよ、迷いの道に踏みこんだ、哀れなる人間の進むべき、正しい道を照し導き給え、と祈る。